

[図書紹介] 戸野塚厚子(著)『スウェーデンの義務教育における「共生」のカリキュラム』

著者	本所 恵
著者別名	Honjo, Megumi
雑誌名	カリキュラム研究 = The Japanese Journal of Curriculum Studies
巻	24
ページ	61-61
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/48417

【図書紹介3】

戸野塚厚子『スウェーデンの義務教育における「共生」のカリキュラム』明石書店、2014

本書は、「多様な人間が違いを承認し互いに協力し合って生きる」こと、すなわち「共生」がスウェーデンの義務教育においてどのように教え育まれてきたのかを、カリキュラムの変遷と教育の現状を通して明らかにしている。しかしながらそこで議論されているのは「共生」の物語にとどまらない。それは、公教育のカリキュラムのあり方を考える上で重要な議論を多く含んでいる。どのような原理で何をどう取り上げるか、現実をどう反映し、誰がどう編成に参加するか、そして現実はどう具体化しどう評価するかといった議論である。

このような議論を可能にしているのは、「共生」が教科ではないからかもしれない。時間数や領域が限定されず、背景に学問体系があるわけでもない。さらには、その教科横断的なテーマが、個人の資質・能力として語られるよりはむしろ社会の状態や人と人との相互関係として認識されるものだからかもしれない。学習者が身につけたか否かという、即時的に判断されがちな個人の学習成果の問題に矮小化されることなく、教育の成果が長期的な社会環境や通念と結びつけて捉えられるからである。実際に同国の関係者によって、数十年の社会変容を根拠にカリキュラムが評価されていたことは興味深かった。既存の枠組で捉えきれないテーマだからこそ、カリキュラムそのもののありようや制度化の過程、テーマが内実化される理念や背景が、重要な事柄として浮かび上がってきたといえるだろう。

具体的には、スウェーデンで現在の義務教育学校が成立した1962年のカリキュラムが、69年、80年、94年、2011年と改訂を経て変容する様子が描かれる。各カリキュラムの内容の検討においては、単純に「共生」という言葉を取り出すのではなく、「共生」の基礎となる「多様性」「民主主義」「平等」なども取り上げて、「共生」を扱う教科が拡大してきたこと、時代に応じて「男女の共生」「障害者との共生」「多文化社会における共生」と重点が変化してきたことが明らかにされている。記された文言を表面的になぞるのではなく、教育現場を意識して関連する内容を結びつけながら検討が行

われる。こうした作業はややもすれば時代も国も異なる立場からの恣意的なものになりかねないが、本書では、社会状況と政策動向が把握された上で、カリキュラム改訂システムの変化も踏まえて、カリキュラムが作られた理念やプロセスが丁寧に検討されており、慎重で信頼できる議論となっている。

そしてそれは決して読者から遠い世界のこととして提示されるのではなく、日本の現状と比較しながら記述される。例えば、制度化されたカリキュラムであるスウェーデンの「ラーロプラン」が、日本の学習指導要領とどう違うのかといった点から詳細に説明されている。こうした堅実な作業によって、読者は具体的なイメージをもって考えることができる。

そもそもスウェーデンは、男女平等、障害者のインクルージョン、移民・難民の受け入れと、「共生」の理念を体現する優等生のように映る。しかしながら本書を読めば、それは自然に存在したものではないことが確認できる。その社会像は、教育をはじめとする多様なアプローチによって社会理念を実現してきたものであり、現在もなお変容しているものなのだ。単純な理想郷を描くのではなく、現実の一つの社会が理想と現実との間で経てきた葛藤を描くことを通して、現実的なイメージをもち、それに照らして冷静に自国の状況を見直して議論することを可能にしていると言える。

幾つか疑問を記しておくとしたら、第一に、「共生」という理念自体への批判的検討はないのだろうか。例えば移民の受入などの具体的な状況を考えると、その理念や実現形態が必ずしもすぐ全員の共通合意を得られるとは限らないように思う。第二は、最新ラーロプランについての評価である。90年代以降のスウェーデンでは、市場化、改革の迅速化、成績や学習成果の重視など、公教育全体にそれまでとは異なる方向性が見られ、2011年版ラーロプランはそれを如実に反映している。この状況を踏まえると、94年版から11年版への変化は、「共生」のカリキュラムに焦点を絞ってみても、教育と政治との関連や、学習成果の評価とカリキュラム評価との関連など、より複雑な問題を孕んでいるのではないだろうか。もっともこれらの点は、丹念な本研究の成果として、今後のカリキュラム研究に受け継がれる課題だろう。

(本所 恵・金沢大学)